

難波西鶴と 海の道

【25】

森田 雅也

難波の西鶴は、北前

船の拠点の一つ、酒田

の豪商「鐘屋」を描

くこと、出世する商

人の見分け方まで書い

ていますが、これを「い

づれ、物には仕やうの

有事ぞかし」と結論づ

けています。

つまり、「すべての

物事には、やり方のあ

るものだ」と、ある断

片的な商人の行動パタ

ーンから、万物の理

を引き出すのです。こ

の世界観の構築こそ西鶴が西鶴たるゆえんと言えらるでしょう。

続いて、「この鐘屋も、武威野のどのくも心取りしめもなく、問屋長者に似て、何国に内証あぶなかりしは、さだまりし買銭とるをまだるへ、手前の商ひをして、大かたは仕損じ、損をかける物ぞかし。問屋一片にして、客の売物・買物大事にかくれれば、何の気づかひもなし」と書いています。

「惣じて問丸の内証、脇よりの見立てと違ひ、思ひの外、諸事物の入る事なり。それを実体なる所帯になせ

商人の行動から万物の理

「いつまで高く評価して書き進めてきた鐘屋なのに、武威野台地のように手広く商いすぎで、世間の問屋同様、その経営状態は危ういというのです。

ところが、西鶴はす

かさず、鐘屋の優れて

いる点をあげます。他

の問屋は、堅実な固定

収入の商いに嫌気がさ

して、別の商売に手を

出してしまい失敗する

が、鐘屋は、問屋商売

を専一にして頑張って

いるというのです。

事実、この一途な商

法が功を奏し、鐘屋は

江戸時代を生き残りま

す。さらに続きます。

「惣じて問丸の内証、

脇よりの見立てと違

ひ、思ひの外、諸事物

の入る事なり。それを

実体なる所帯になせ

ば、かたからず衰微して、家久しからず」

問屋の暮らし向き

は、他からの見かけと

違い、思ひの外、何か

につけて費用がかさ

む、それを節約すると、

じり貧になって、必ず

衰微して家を滅ぼして

しまつというのです。

加えて、「年中の足

り余り、元日の五つ前

ならではしれず。常に

は、算用のならぬ事な

り。鐘屋も仕合せの有

る(もうけのあった)

時、来年中の台所物、

前年の極月に調へ置

き、それより年中取り

込む金銀を、長持にお

とし穴を明けて、これ

にうち入れ、十二月十

一日さかまつて勘定を

仕たてける」と西鶴は

書きます。

一年中の商いの収支

は正月の朝八時頃にならな分らないもので、普通は予測がつかないもの。なのに鐘屋は、もうけのあった時に来年度の台所用品を買ってしまうなどして、ちゃっかりと蓄実に金銀をためていきます。

西鶴は、そのしたた

かさこそ、「たしかなる買問屋、銀をあげ

ても夜の寝るる宿なり」だとして、絶賛してこの章をこじます。

もしかすると、酒田

の鐘屋は西鶴にとっ

て、問屋商いの鐘の

店であるとともに、何

かの思い出深い場所であ

ったのかもしれない

んね。

(関西学院大学文学部

文学言語学科教授)

西鶴ならではの世界観構築